

きずな 2018

10月も残りわずかとなり、色とりどりに色づいた街中の木々の葉も残り少なくなった今日この頃。みなさんの学校では、予算要望や学校行事も一段落した頃ではないでしょうか。

さて、今回の「きずな」は、9月13日14日に函館市を会場におこなわれた第68回北海道公立小中学校事務研究大会に参加された方から各分科会等の感想をいただきましたのでご覧ください。



第1分科会報告

富良野市立扇山小学校 今村 凌太

はじめに

第1分科会は「予算要望としての子どもアンケート」と「学校づくりとしての子どもアンケート」という2本の討議の柱に沿って論議されました。

1日目

1日目はレポート発表がされた後に1本目の討議の柱である「予算要望としての子どもアンケート」について参加者が主体となり発言をしていく形で分科会が進められていきました。

司会者から参加者への主な質問として①予算要望について子どもアンケートを取っている学校は集約したアンケートを予算要望に反映しているのか？②アンケートの集約で工夫していることは？③子ども

上川管内公立小中学校事務職員協議会
 発行者 広報担当 前畑孝明（名寄東小）
 第4号 2018, 10, 26

と教職員との要望が食い違った場合どのように要望に優先をつけている？などの質問がありました。

ここでは各質問の参加者の発言を一部抜粋という形で報告いたします。

①の質問に対して…アンケート結果を予算要望に反映している学校が多かったです。「子どもたちの生活の場である学校」だからこそ子どもたちの意見を取り入れているとの声もありました。しかしその一方で以前はアンケートを取っていたが数年経過しても結果が変わらなかったためアンケートを取るのをやめた学校もありました。

②の質問に対して…特に工夫をしていることではないが先生方との日常の会話を大事にしているという声が多かったです。また、実現不可能なものは要望をあげないでくださいとお願いしているところもありました。

③の質問に対して…大人子どもで分けているわけでは無いが要望の重要度の比重で優先順位を付けているところが多かったです。

まとめ

助言者として参加されていた函館市の教育委員会の方もおっしゃっていたことですが学校に実際に予算を付けるのは市や町の財政・財務課ではあるがその財政・財務課と教育委員会とのヒアリングの際に現場の声は決定打にはならないが説得力のある武器にはなるとのことでした。そのため、説得力のある武器を作るためにも継続して要求したり、現場のリアルな声（特に子どもたちの声）を取り入れたりの重要性を改めて感じました。また、実際に学校で生活している子どもたちが困らないように教



函館大会の視察
 椎名実行委員長と坂本事務局長

育環境整備を進めていく必要があることも感じた1日でした。

2日目

2日目は2本目の討議の柱である「学校づくりとしての子どもアンケート」について前日と同じく参加者が主体となり発言をしていく形で分科会が進められました。

2日目の分科会の中で特に印象深かったのが司会者から参加者への質問で「今後も子どもアンケートを取りません・とりくみませんと言う人はいますか」という質問にイエスカノーで答えるものでした。

参加者の大半はノーだったのですがその中でイエスと答えた人に対して理由を聞いていました。

イエスと答えた方々はとりくまない理由として仕事の多忙化からとりくむ余裕が無いという方やそもそも市教委とヒアリングをする機会がなく要望も通らないのと言う方、要望を取っても子どもたちに返すことができないので行わないと言う方もいました。また、以前は行っていたが今は行っていないという方が、アンケートを行っても行わなくても予算要望の結果が同じなのであれば別の仕事に力を入れるという方もいました。

まとめ

学校づくりとしての子どもアンケートという討議の柱を立て2日目は進められましたが、意外にも前段の部分で子どもアンケートを行わない・今後行う予定は無いという学校が多かったように感じました。

確かに予算要望としてのアンケートとすればなかなかアンケート結果を有効に活かすことは難しいかも知れません。しかし、学校づくりとしてのアンケートととらえれば子どもアンケートを実施することは子どもたちがこんな考えを持っているということを知る年に1度の機会になったり、子どもの視点から見た学校を知ることができたりと子どもたちに自分たちの生活の場である学校について考えてもらうことができるチャンスを作ることができると思います。そしてそのチャンスを教育環境整備に活かすことができるようになりたいと感じた2日目の分科会でした。

最後に

第68回北海道公立小中学校事務研究大会函館大会の第1分科会での2日間を通して、子どもアンケートについてじっくりと考えることができました。本校でも子どもアンケートを活かして、予算要望作成の手助けや教育環境整備が進められるよう継続して行いたいです。



第2分科会報告

東神楽町立東神楽中学校 明石 昌人

- ・釧路管内における保護者負担軽減～釧路支部

「学校配当予算の金額とその費目一覧」「学校徴収金（保護者負担金）の種類」「公費・私費区分の状況」の基礎資料を基に、釧路管内1市6町1村での「保護者負担軽減の取り組み」についてのレポートでした。8回の研修を通して管内の保護者負担の現状について、市町村それぞれの状況把握を行い、今後一層の「保護者負担軽減と公費化」にむけての足掛かりとし、とりくみを進めたいとの報告でした。
- ・標津町における保護者負担軽減の取り組み

～根室支部

小学校2校、中学校2校と教育委員会との連携により、①町内統一備品管理 ②文書分類表・文書取扱要綱作成 ③町教委様式集電子化などの課題解決を図るなど良好な関係性のなか、町独自の子育て支援政策が比較的厚い標津町で、教育費無償の原則に則り、学校徴収金調査などを通してさらに「保護者負担軽減・公費化」を目指しとりくんでいる実践報告。
- ・子どもの貧困問題への対策 ～網走支部

子どもの貧困問題への対策として、「就学援助」と「保護者負担軽減」に着目し、実態調査を通して課題解決を図ろうとする。「就学援助」につ



いては紋別ブロック5市町村の実態を把握し、追加3項目の支給拡大や申請しやすい環境づくりへ改善。「保護者負担軽減」のとりくみについても、実態調査から見えた課題について校内教職員への情報発信を通し情報共有を行うことなどにより課題解決へつなげたことへの報告。

・分科会での討議

「保護者負担軽減」「公費化」については事務職員として、とても大きな問題としてとらえ、それぞれの学校で金額の大小にかかわらず「公費化」にむけて多くの実践が行われていることを実感できました。若い方の疑問の中には、保護者負担を私費負担から公費化したいがどこまで公費化すべきかわからない。管理職やベテラン教員から受益者負担を持ち掛けられなかなか公費化へのとりくみが進まないなどの意見もありました。すかさず助言者から義務教育費無償の原則により本来はすべて公費であるべきで、その財源がないから受益者負担の考えが出てきたことの経緯が語られ、できることは挑戦すべきと若い方への後押しとなる発言などから活発な討論が展開されました。

残念だったのは、網走支部では一部で学校間連携の話題が話されたものの、町教委との関係性が良好であると語っていた標津町ですら学校間連携の重要性が認識されていないこと、さらに「保護者負担軽減」のとりくみであるはずなのにPFシートやバランスシートの活用がなされていないのが現状でした。

上事協のひと・もの・かねを意識した教育環境整備を通しての学校づくりをあらゆる場で広めていくことが重要であります。さらに予算獲得には市町村の財政・理事者への働きかけが必要で、そのための学校間連携の重要性や必要性を上川から発信していかなくてはならないと実感しました。



第3分科会報告

士別市立士別小学校 佐藤 直行

今年度、上川支部からは士別ブロックがレポート発表ということもあり第3分科会の「学校づくりと学校事務」に参加しました。最初に発表者の士別南



中の葛西さんは滑らかな口調で分かりやすくポイントを得た話をされ、司会者の幌加内中の原田さんは参加者からうまく発言を引き出す名司会であったことを報告します。

1日目に十勝支部より

「学校に要てこそその学校事務職員」と題して、様々な職種から講話をしてもらうことで自らの職を見つめなおすという今までにあまり見られない発表がありました。その次に、上川支部より「子どもたちの生活の場を意識した教育環境整備」の発表がありました。最初の討議は子どもや教員との関わりということで行われました。管内の研究会でも話題になったことで、子どもに指導ができるかという話が出たときに助言者の校長から教育課程に沿ったことは教員のすることだがそれ以外の部活や行事、休み時間の対応であれば職種にこだわる必要はないのではとの話がありました。ただ、各学校の生徒指導の方針もあり十分注意して対応することは欠かせないと思います。その後子どもアンケートの話題になり、欲しいものだけではなく学校で好きなところを書いてもらうというとりくみが紹介されました。子どものアンケートの回答には参考になることが少ないという意見もありましたが、子どもに学校の施設や物品について関心を持ってもらえるということや子どもの思いを聞くことができるメリットもあるようです。

最後に助言者から分科会1日目について話をいただきました。校長の助言者からは、子どもアンケートは非常に手間のかかる作業だが自ら能動的に子どもの思いを探るといった意味のあるとりくみであるという話がありました。

事務職員の助言者からは、学校内をまわる重要性について話され、教育環境を職務とするのであれば自らの目で確認する必要があるとのことでした。いずれの助



言者も教員とのコミュニケーションを十分にとり情

報をしっかりと押さえる必要性が語られました。



2日目は学校間連携の交流で始まりました。スタイルは様々ですが学校間連携のとりくみは

全道的にかなり広がっているようです。会議の形式は教育長名で招集するきちとしたものや市町村教研の班会議を活用しているものがありました。また、Web上での交流をしているという報告もありました。とりくみ内容も予算要望から保護者負担軽減、学校徴収金の把握など多岐にわたっていました。

第3分科会は、学校づくりがテーマですが、十勝のレポートからは全教職員のみならず給食センターの職員、PTA会長までをも含めたものを感じさせるものでしたし、上川のレポートからは教育環境を整備するためにひ的、かね的、もの的という新しい視点でのとりくみが新鮮に感じました。そういった意味も含め大変有意義なものであったことを最後に報告いたします。



第4分科会報告

東川町立東川第一小学校 大垣 隆志

【地震後の開催】であり、運営関係者そして参加者も混乱のなかでの大会でしたが、懇親会が中止になった程度で、無事、成功に終わったと感じました。来年度、上川実行委員会によるライフオート開催も盛況に行われるようにまた1年頑張りましょう。

【第4分科会では4つのレポートが発表】されました。小樽市支部から校内組織と事務職員の職務についての考察。旭川市支部から事務職員が楽しく生き

生きと事務実践を行うために～旭川市公立小中学校事務職員協議会第1グループの研修活動～。渡島支部は、ワークショップ型研修の実践から～主体的に参加し実りある研修会に～。胆振支部からは事務職員の活動～私の学校での取り組みについて～でした。

【討議の柱】は2つ用意されていました。

1つめは、事務職員の研修について、(1)研修の目的・組織的研修の継続参加者へのアプローチ。参加しやすい形態・個人の力量へのアプローチ。実務と創造性(2)各支部の研修内容の交流が討議されました。

2つめは、校内組織と事務職員について、〈現場〉では、各校における業務内容～人との関わり(職員、児童生徒、保護者、地域)、異動時の業務の引継について。〈今後に向けて〉は、今年度、業務の変化があるか、今後、予想される変化について討議されました。

【印象に残ったこと】は、まず参加メンバーの若者が多いこと。わからないこと、決まっていないこと、多忙化、いろいろ抱えている様々な学校規模・年代の事務職員。そんな事務職員の職務について「学校事務について考えたい!」「楽しく、生き生きと仕事したい!」「研修を活性化させたい!」という情熱を感じました。YES・NOカードを使ったり、6名前後の小グループで話し合ったりもしました。旭川は、それぞれの事務職員がどうして事務職員になったかや楽しい時・やりがいを感じる瞬間のインタビュー動画も流しました。

【職務確立】に関しては、胆振は学校での取り組み(財政・管理・通信・行事)ごとにどのようなものをどんな状況でどのように対応しているかアンケートをとり分析。小樽では校内組織・校務分掌内容等のアンケートを行っていました。



【研修の活性化】については、渡島は、ワークショップ型研修(9回)の実践から主体的に参加し、実りある研修会で、年齢差を越えた研修が行われているとの発表。旭川では『仕事は楽しく』をテーマに①実務研修(実研)②楽しくなる研修(楽研)③学習(法研)④交流の4つの研修が行われている報告がありました。交流では、若手の20代にむけた研修や世代間引き継ぎを意識した研修が話題にあがりました。

【チーム学校・つかさどる】に関しては今年変わったこと、つかさどるで明るいこと・これから期待できること・楽しみなことをテーマに話しました。今までもチームで仕事をしてきた。つかさどる仕事をしてきた。北海道の事務職員は先輩から受け継いできた自負があるという意見が出ていました。

【さいごに感想】ですが、多忙化に拍車がかかる中、全道研で元気をもらって帰る一人だと思っています。研修より学校を楽にしたいという気持ちもわかりますが、研修で楽にする・楽しくするという考え方はありだと思えます。働き方改革を孤独で考えるのではなく皆で練りあう時代だと感じました。参加させていただきありがとうございました。

第5分科会報告

東川町立東川中学校 菊地 康子

9月6日に胆振東部地震が発生し全道事務研が開催されるのか心配しましたが、函館支部のみなさんのがんばりにより懇親会を除くすべてを行っていただきました。研究大会にかかわってくださったみなさんに感謝申し上げます。

さて、私は第5分科会『未来へつなぐ北海道の学校事務～職務検討委員会答申を基に考えよう！「これ



からの学校事務」～』に参加しました。この分科会では剣淵中の盛多さんが職務検討委員として活躍されていました。たくさんの先輩方に囲まれ質問されたりしながらも、臆することなくポスターセッションを進められていて、本当にお疲れ様でした！感謝申し上げます。

はじめに職検から答申についての説明があり、その後四つのグループに分かれポスターセッションになりました。第一ブースでは『学校事務の「専門性」』、第二ブースでは『法改正「つかさどる」「共同学校事務室」「職務標準表」』、第三ブースでは『地域との連携「コミュニティースクール」』、第四ブースでは『学校事務業務の見直し』と課題が設定され、職検が課題の説明をした後に説明を聞いていた私たちが「疑問なこと」「知りたいこと」「期待すること」をそれぞれ付箋紙に書いて貼りつけていきました。次の日にはそれぞれのブースでの際立った疑問・期待についてまとめを職検がしてくださって、それについてさらにどのように思うかということに参加者が意見を出し合いました。

二日間分科会に参加させていただき、印象に残っているのは「責任ある仕事をしていますと言うのが本当なのか？自分がそう思っているだけで、第三者はそう思っていないのではないか。何かが決定的に変わらなければならないのではないか。分科会に出てくるものがリメイクされたもので30年前と変わらない。変わるということはどういうことなのかを問わなければならない」という言葉です。北海道は全国と違い、学校事務というものを先輩方が領域実践(教育環境整備活動)を通して学校間連携会議・共同学校事務室へと昇華させてくれました。私はただそれに乗っかって毎日を過ごしているだけなのではないかと反省します。もっと「子どもたちのため」を一つひとつのとりくみに入れていくことの重要性を確認しながら日々仕事をしていかなければならないし、先輩方のように実践を積み重ね継続し、「学校事務？あ～、あの仕事をやってる人ね。」といつか言われるようにしなければならぬと思いました。

函館の夕べの報告

士別市立多寄小学校 富樫 奈菜

今回、初めて函館の夕べに参加させていただきました。交流の中では、日々の業務についての悩みや楽しみ、困ったことや励みになったことなどを話し合いました。その中で、「仕事をしていくうえで、どのようにモチベーションを保っているか？」という質問がありました。参加者からは、子どもと触れ合う時間を大切にしているという意見があり、同じように悩み、考えている仲間がいるのだと感じました。

私自身、新採用の頃は日々の業務にとりくむ中、子どもたちと遊んだり、話を聞いたりすることで元気をもらったり、先生方と子どもの様子について話をしたりするきっかけにもつながりました。今後も、子どもたちや先生方と積極的に関わりをもち、学校においてこそその事務職員となれるように努めていきたいと思えます。

函館の夕べに参加し、同じように悩み、頑張っている仲間がいることを改めて実感しました。また、企画、運営していただいた皆様、貴重な機会を設けていただき、ありがとうございました。



大先輩 渡邊春彦調査役

今回の全道事務研は、上事協からの32名を含む500名近い参加者のもと開催されました。

9月6日に発生した「胆振東部地震」により全道事務研の開催自体があやぶまれましたが、無事開催することができました。総会での会長あいさつでは、全道協議会と現地実行委員会の間で、連絡手段が限られ時間のないなか対応を協議し、全道事務研の開催を決断したとの話があり、端会長の涙ぐむ姿がそこにはありました。全道交流会の中止、交通機関の不通で参加できない方への昼食弁当の払い戻しなど、適切な対応により、成功裏に終わった大会だったのではないのでしょうか。

今回、それぞれの分科会で学んだことを各市町村・ブロックで交流していただき、それぞれの教育環境整備を一層前進させる糧としていただきたいと思います。

次回、2019年度の第69回全道事務研は、上事協が主管支部となってライフポート札幌にて開催されます。椎名実行委員長を中心に、上事協会員一丸となって大会が成功裏に終わるよう準備を進めていきたいと思えます。会員一人ひとりのご協力をよろしくお願いいたします。



総会であいさつをする椎名実行委員長

